

保育の現場から

一学期と二学期の「あいだ」とは ――夏休みを経て子どもたちと再び出会う――

横井 紘子

一学期は「世界」の再構成の時期

昨年度、私は保育者として一年生でした。初めての担任。初めて担任として出会った三歳の子どもたち。入学式の日から、私の予想を超えることの連続でした。どんどん出てくる「問題」（と当時の私にとらえられたもの）に、即効的で直接的な対処の「方法」を求めようとしても、保育にはそのような

万能の「方法」はありませんでした。

子どもたちは、何を感じ、何を思い、何を抱え、それをどのように表現しているか……。換言すれば、一人ひとりがどのような「世界」を生きているのか、その「世界」を理解しようとする営みだけで精一杯の毎日でした。一人ひとりの子どもが生きている「世界」は、その子どもに固有のものです。「世界」のあり様は、一人ひとりそれぞれに違つて

いて、表現する仕方違います。しかし、固有の「世界」を生きているという事実、一人ひとりに同じであり、それぞれの「世界」は別の「世界」と全く異質のものではなく、大小の差異はあっても、本来的な構造は同様で、お互いの「世界」が交差する可能性を多分にもっているものだと思います。

毎日、子どもと向き合い過ごす日々。それは、一人ひとりの子どもの「世界」に触れる中で、私の「世界」が少しずつ形を変え、広がり、深まり、再構成される営みでもあったように思います。

入園したての子どもたちにとっても、幼稚園という新しい場所で暮らすために、これまでの自分の「世界」を再構成しなければならなかったと思います。その再構成に快を伴い、スムーズに新しい「世界」を獲得する子どももいれば、幼いながらにしっかりと築いてきた自分の「世界」がガラガラと崩れ、再構成に辛い思いを伴った子どももいたと思

います。その再構成のお手伝いをするのが、保育者の仕事の一つかもしれません。

入園直後は、なかなか幼稚園が居場所にならずに、何とか自分の身を寄せられる場所を探そうと必死な子どももいました。私の姿が見えなくなると大泣きしたり、おままごとの場所を堅固に囲ってそこから出てこなかったり、片づけになると今まで安心して過ごしてきた遊びの世界を壊されることがこの世の終わりだと言わんばかりに極度に抵抗を示す子どももいました。

しかし、一学期も終わりになると、子どもたちは、担任である私の存在はもちろん、友達の間にもずいぶんとわかるようになり、みんなで一緒にすることが楽しく感じられるようになりました。入園当初は保護者と離れられなかったり、泣いたりするなど不安な様子をあらわにしていた子どもたちも、担任とのつながりを基盤に、徐々に友達とのかわり

を楽しめるようになり、行動範囲も広がっていきま
した。生活の流れもずいぶんと体でわかってきたよ
うに感じられました。

夏休みを迎えて

やっと、私も子どもたちも幼稚園の生活に慣れて
きて、幼稚園で過ごすことが楽しくとも辛くとも生
活の一部として位置付いてきたと感じられるころ
に、夏休みを迎えることになりました。夏休みの予
定を楽しそうに話す子どもたち。かく言う私も、四月
から無我夢中で走ってきて、少しのんびりする時間
が欲しいと感じていました。終業式。慌しくも、何と
か無事に全員で夏休みを迎えることができました。

夏休み中に、クラスの一員でもあるインコのピー
ちゃんをMちゃんの家で預かってもらうことになり
ました。こちらのアナウンスが遅れてしまったこと
もあり、終業式の次の日に、Mちゃんはお母さんと

幼稚園に取りに来てくれることになりました。

終業式の次の日。幼稚園には普通に出勤するもの
の、砂場や遊具の準備はしません。八時五十分に
なっても、外から子どもたちの声は聞こえず、九時
になっても廊下をわれ先にと部屋に向かう子どもの
姿は見えません。幼稚園が、ただの入れ物になって
しまったようで、「幼稚園」にはいるけれど、ここ
は「幼稚園」ではない、不思議な感覚です。

しばらくして、Mちゃんとお母さんがピーちゃん
を引き取りに来てくれました。「Mちゃん！元気
だった？」昨日も会ったはずなのに、そんな言葉を
かけてしまった気がします。お母さんは、「Mはよ
くピーちゃんの話をしていたので、お預かりできて
うれしいです。」とお話ししてくださいました。私
は、Mちゃんはピーちゃんがいることで、どこかで
幼稚園の生活とのつながりを感じて夏休みを過ごす
のだらうと感じました。

「ほかの子どもたちはどうだろう？」私は、ふと考えました。楽しい充実した夏休みを一か月以上過ごし、二学期になって幼稚園に来たら、私や幼稚園の生活は忘れてしまっているのではないだろうか。また入園直後のように、「世界」の再構成という大きな課題が子どもたちを待ち受けているのではないだろうか。夏休みも終わりに近づき、二学期が近づくにつれ、私はどんな不安になっていきました。一学期に築いてきたものが、子どもに「リセット」されてしまっているのではないかという不安がよぎりました。

夏休みはつながっている

始業式。いつも登園の早いHが「おはようございます！」と元気に部屋に入ってきました。お母さんは「早く幼稚園に行きたいって、ずっと言っていたのですよ」とお話ししてくださいました。すぐにコッ

プとタオルと外靴を出し、自分の場所に戸惑うことなく手を伸ばします。「Hちゃん、よく覚えていたね。」私は思わず言葉をかけましたが、Hは笑顔を返すだけ。ほかの子どもたちも続々と登園してきました。夏休みのことを私に一生懸命話してくれたり、久しぶりに会う友達との再会がうれしくてはしゃいだりしながら、ほとんどの子どもが戸惑うことなく、朝の支度を始めます。

「先生！ せっけん新しくなってる!!」Hは手を洗いながら、私に言いました。一学期の終わりにはとっても小さくなっていたせっけん。Hは、自分のタオルや靴の置き場所や、小さいせっけんのことをいわゆる「知識」として覚えていた、というわけではないでしょう。一学期に毎日使っていた場所やせっけんを取り結んでいた関係が、Hの「世界」に、Hの体にしっかりと刻まれていたからこそ、一か月以上幼稚園から離れていても、逐一思い出す

必要なく、自然と意識と体が一体となって動いたのだと思います。そして、「あれ……せっけんが違う……」と不意に気づいたのでしょうか。

一学期にたくさん探したダンゴムシを探りに、自然と山へ出かける子どもたちも大勢いました。「何で、ダンゴムシ少なくなってるの?」「草がいつばいになってる!」自然の変化にも自分なりに気づいていく子どもたち。

一学期に落ちている青い柿の実を見つけて、一生懸命拾っていたR。「食べられる?」と私に聞きます。「もう少したつと、大きくなっておいしそうなオレンジ色になるから、それまで待っていいよね。」と私が言くと、納得したような納得していないような顔。夏休み明け。Rはいつの間にかオレンジ色に色づいた柿を持って部屋に戻ってきて、「おいしいぞ!」と食べようとしていました。

一学期の経験が地平となり、それぞれの子どもの

中に備わっていることをさまざまな姿から感じました。そして、その地平を基盤としつつ、子どもたちなりにいろいろに気づいた変化を驚きやうれしさとして表現し、「世界」を豊かにしていく姿をたくましく思いました。

また、一学期中は朝お母さんと離れられず、「おはようございます」のあいさつが言えなかったAという女の子がいました。しかし、二学期の第一週の日曜日、とても元気に、とても自然に、「おはようございます!」と言って登園してきました。私は初めてのことと、驚きとうれしさを隠せませんでした。すると、Aは私の反応に戸惑ったのか、急に表情を変え、お母さんの影に隠れて、出てこなくなっていました。

私は「しまった……」と思いました。Aにとって一学期は辛い朝からのスタートでした。しかし、徐々に私との関係もできてきて、お母さんがいなく

でも、楽しい時間が過ごせるようになってきて夏休みを迎えました。夏休みにはお母さんやお兄ちゃんとうつくりと過ごしていたようでした。私にとつては、その朝のAの姿は突然のものとしてとらえられ、A自身にとつては、一学期の経験と夏休みの経験を経て、A自身における幼稚園への思いが少しずつ変容した結果としての、その日の朝の姿だったのだと思います。

ほかにも、一学期には自分の思いを言葉で表現することの少なかった子から、「先生、一緒にお外に行こう!」と大きい声で誘われたり、私に触れられ



ることすら嫌がついていた子が「おんぶー」と甘えてきたりと、うれしい驚きがたくさんありました。

一学期と二学期の間に大きな「区切り」があるのは確かだと思いますが、私はそれを「リセット」の時期として、幼稚園生活を「断絶」するものとして感じていたのだと思います。しかし、子どもたちは一学期の経験を充分に「世界」に備えながら、一学期と二学期のつながりを、また、幼稚園生活と家庭生活のつながりをどこかで感じつつ、さまざまに夏休みを過ごしていたのだと、子どもたちの様子からありありと感じました。どうやら止まっていたのは私の時間だけだったようです。日々の保育の中でもさまざまな経験の連続が、さまざまな形に束なつて、今の子どもの姿であることを常に感じていたと思います。

(前お茶の水女子大学附属幼稚園 教諭)

現同大学大学院 人間文化創成科学研究科)